

# 釜石を離れても、 釜石を想う人たちがいる



西野淑美（首都大学東京 都市教養学部）

## Profile にしの・よしみ

1973年生まれ。首都大学東京都市教養学部都市政策コース助教。

専門は都市社会学。主な論文に「要介護化と都市の空間性」『年報社会学論集』17号、「ライフステージの中の震災後住居選択」『社会福祉』46号など。

## 釜石を離れた人も 釜石の一部

釜石という地域がどのような姿になったのかを知りたい、と思ったら、今は釜石を離れたが以前は釜石にいた人のことも、考える必要があるだろう。

釜石市では1963年をピークに人口が減少したが、そこには釜石製鐵所の縮小という明白な理由があった。もし配置転換に同意して釜石を出る人がいてくれなかったら、また新卒の若者がほかの都市で就職して自活してくれなかったら、市内は失業した人であふれてしまったかもしれない。釜石に残った人が変化に対応しようと努力したのももちろん、釜石を出た人が移動先の地域に努力して定着したことも、釜石という地域を間接的に支えたのではないだろうか。

私たちが釜石市の統合前4高校の同窓会の協力によって行うことができた「同窓会調査」(詳細は広報かまいし10月号参照)では、戦後40年にわたる卒業生2489名から回答を頂いた。そのデータから、

高校生の時に釜石の構成員だった人たちが、その後どの地域に移動したのか紹介する。回答者の約3分の2は、現在は釜石の外に住んでいる。釜石出身者のネットワークの広がり、想いを馳せてみていただきたい。

## 地域移動の図の見方

変化がはっきり分かるように、生まれた時期の違う2グループに絞って比較する。一つは1935～1944年生まれ(以下「戦前生まれ」)で、現在65～74歳、釜石市の人口増ピークの1963年までに高校を卒業している。もう一方は1960～1977年生まれ(以下「1960年以降生まれ」)で、現在32～49歳、高校卒業は新日鐵の第一次合理化より後である。

八つの図は、両時期のグループについて、それぞれ男女別に、高校後に大学や専門学校などに進学しなかった人(「高卒者」と、進学した人(「進学者」)に分けて、住んだ地域の変化を示す。最終学校時から現在までの4時点の間に、それぞれ「釜石」(大槌町

も含めている)、釜石・大槌以外の「東北」、「関東」のどこからどこへ移り住んだ・住み続けた人がどれだけいるかを、矢印の太さで表している。3地域以外の地域ブロックは該当者が少ないので省略した。小さい数字は、その時期にその矢印の移動をした人が、3地域以外も含めた全員の何%に当たるかを示す。

## Uターンの増加と 東北志向

まず、高校卒業後に進学しなかった人を見てみよう。戦前生まれの高卒者の大半は、釜石内で就職し、釜石に住み続けたことが分かる。外で就職に就いた人はそのまま外にいる。つまり、初職後はほとんど地域移動がなかった。ただし、製鐵所の配置転換の影響もあり、30歳以降に動いた男性もいる。また女性は、結婚のために途中で釜石を出る人たちがいる。それに対して1960年以降生まれは、釜石の外で初職に就く人が多くなる。また、30歳までに釜石にUターンする人がいることも、戦前生まれとは異なる。



結果として、30歳時の居住地の割合は、戦前生まれとそこまで変わらない。高校後に進学した人はいか。戦前生まれでは、そもそも高校後に進学する人が少数だった。関東への進学が多く、特に男性はその後釜石に戻る人が少なかった。1960年以降生まれでは、大学などへ

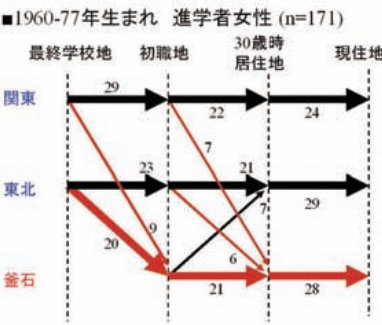
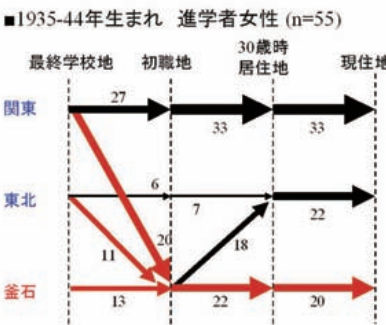
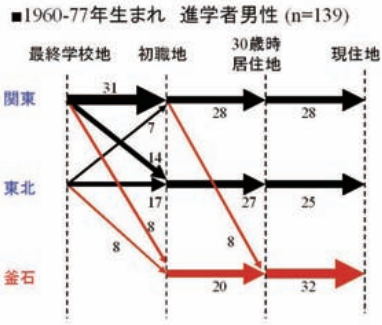
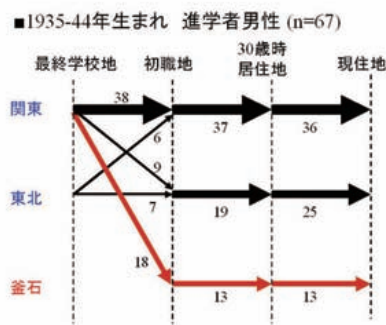
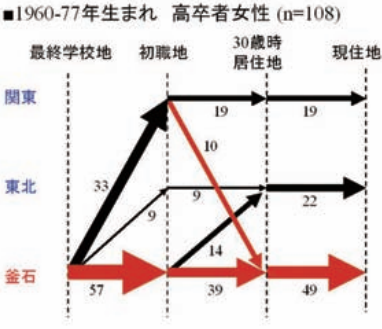
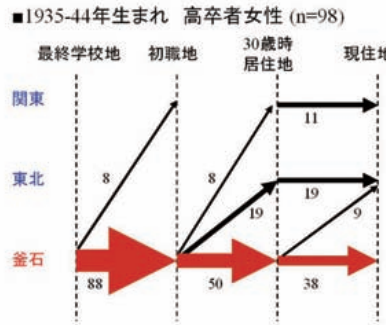
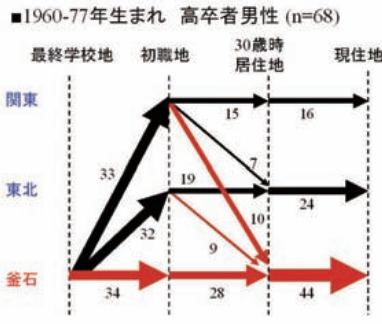
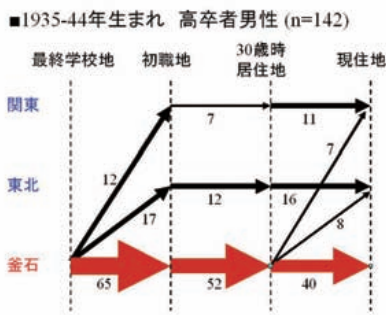
の進学率が上がったので、高校後に市外に出る人の割合自体が増えた。ただし、東北への進学が増え、初職も東北が増えている。その後釜石にUターンした人もいる。結果として戦前生まれの進学者に比べて、現在釜石に住む人の割合が上がった。

### 外の経験と 外からの応援と

まとめてみよう。戦前生まれは高卒後の進学者は少なく、進学しなかった人はほとんど釜石で就職した。ただ、釜石を出た人はそのまま戻ってこなかった。一方、1960年以降生まれは、進学で釜石を

出る人が増え、進学しない人もいったん釜石を出るようになったが、どちらも並行してUターンの割合も増えた。出る率も上がったが戻る率も上がったので、転出の影響が一定程度抑えられている。さて、皆さんの実感に合うだろうか？若い人が戻ってこない、という言葉は釜石で多

く聞く。もちろん、釜石で育つ子どもの数自体が減ってきたのだから、Uターンの「割合」が一定程度あっても、「人数」は多く感じないかもしれない。ただ、釜石市在住の皆さんを対象にした別の調査（「市民意識調査」、広報かまいし10月号参照）を見ても、現釜石市民の約3分の1はUターナーである。釜石の外を経験して釜石に戻ってきた人の視点やアイデアは、貴重な活力にできるのではないか。それから、現在釜石の外に住む釜石出身者も、釜石への関心は高い。例えば、同窓会調査で「釜石に誇りを持つ」と答えた人の割合は、現在釜石外に住む人で60%に上り、釜石在住者（50%）より高いのである。



※ 5%未満の矢印は省略。釜石市・大槌町以外から高校に通ってきていた人は全体から除いて集計。30歳時居住地無回答者や、30歳以降に初職に就いた人は、当該項目では除いて集計。(グラフ中のnは標本数)

私たちは7月に、釜石高校同窓会関東支部の総会にお邪魔した。卒業後何十年たっても釜石を大事に思う皆さんが、約160名も集まっていた。釜石を離れても、釜石の役に立てないかと願う人たちが日本各地にいる。それは釜石の大きな財産であり、生かす余地がある希望の種ではないだろうか。